

中世ヨーロッパの「マヌ・メテイア」

—説教集を読む視角と方法—

赤江 雄一

一四世紀中葉の北イングランド、ヨークの町は黒死病の猛威から、まだ回復しきっていないかった。この町を西から東へ貫くウーズ川

の北に、当時も今もヨーク大司教座聖堂とウーズ川の間、川べりの狭い土

地に、アウグスティヌス隠修士会のヨーク修道院が建っていた。宗教改革以

前の一四世紀には、大司教座聖堂とウーズ川の間、川べりの狭い土

むということにどういう意味があるだらうか。以下、歴史学的な文脈における説教研究の視座と、筆者の研究の一端を記したい。

中世西欧の説教研究の端緒は一九世紀のルコワード＝マルシウス（A. Lecoy de la Marche）¹あり、その後、两大戦間期にア

ウスト（G. Owst）²の古典的研究を得つつも、それ以降一九七〇年代に入るまで大幅な進展を見ることがなかつた。説教は、長い

時代で近い時代を生きた托鉢修道士であるドゥンス・スコトウスやウィリアム・オッカムには比肩すべくもない無名の存在であ

る。彼が説教集を著してから六世紀半後の現在において、それを読

は少ないとしてこれを扱わなかつた。ウォールドビーの説教集がほとんど注目されなかつたのも当然である。

しかし、過去四〇年の間に、こうした状況は劇的に変わり、説教研究は大幅な進歩を遂げた。³歴史学におけるこの変化は、一九七〇年代以降の、ル・ゴ・ラフなどのアナール派の歴史家たちとロシットのグレーヴィッチらの研究に端的にあらわれている。彼らは、中世人の心性をあらわにする史料として、説教のなかで聴衆の興味を惹きつけるために用いた訓例話に注目した。訓例話研究は日本でも主に九〇年代に紹介・翻訳され、さらに研究も生み出されてゐる。

だが、説教そのものの研究において決定的に重要なのは、一九六九年から二〇年以上の年月をかけて、西ヨーロッパ中の図書館や文書館に眠る膨大な量の説教写本を目録化したシュナイヤー（Johann Baptist Schneyer）の業績である。⁴この目録をもとにしたある計算によれば、一二世紀から十五世紀にかけて一四万もの説教が現存しているという。しかし、シュナイヤー目録には遺漏も少なくないことが指摘されており、同目録の追加改訂作業が現在進行中である。それでもなお、シュナイヤーの目録は、個々の説教写本についての情報を提供する点で有用でありつづけているだけではなく、その長大さが、莫大な量の説教史料が一三世紀初頭以降に出現したと

いう事実を強烈に実感させる迫力を保持している。

シュナイヤー目録を利用した研究のなかで第一に言及すべきは、デイヴィッド・ダブレーによるものである。膨大な数が現存する説教写本の大部分を占めるのは、他の説教者たちが（多くの場合俗人に向けて）自らの説教を作る際に手本・範例として使うための範例説教集である。ダブレーは、特に人気の高かつた——すなわち百を超える写本が残っている——一二世紀の範例説教集に注目し、それらの多くがパリ大学に関連した托鉢修道会士たちによって著作されたものであることを明らかにした。そもそもドミニコ会およびフランシスコ会に代表される托鉢修道会が設立されたのは、数々の異端を生んだ一一世紀後半から一二世紀にかけての激しい教会改革運動の時代を経て、異端の教説に陥る危険性のある人々、とりわけこの期間に大きな発展をとげた都市の人々を正統信仰に繋ぎ止めるためだった。彼らは、俗人に対して積極的な司牧活動を行つたが、その活動の主柱が説教だったのである。

ダブレーらの研究によつて、托鉢修道士たちが、パリ大学を頂点とし説教の執筆と実践を体系的に支援するシステムを整備したことがわかつてきた。それぞれの托鉢修道会は、固有の教育システムを通じて説教者を養成したが、それにあたつて、説教者が説教の草案を作成する際に参照する、範例説教集、訓例話集、聖書語訳集、

詞華集といった様々なジャンルで著述・編纂・筆写をおこなつただけでなく、修道院のネットワークを通じて、それらの著作を西ヨーロッパ全体に流布させていったのである。個々の托鉢修道会士は、

こうした説教支援著作を用いて自らの説教を著述し、最終的には口頭で民衆に説教を行った。現存する説教の大部分はラテン語で書かれているが、これらは俗人に対しても説教された時点では俗語で語られていた。こうして一三世紀以降、托鉢修道士の説教は、活版印刷に先立つ大量言説普及システム、すなわち「マス・メディア」を構成していたといえるほどの規模で行われていたと考えられるようになつて⁽⁴⁾いる。

しかし、その全体像の解明は容易ではない。個々には校訂も研究もほとんどなされてこなかつた膨大な数の説教写本に直面して、説教研究者は研究に供する説教の数を限らざるをえない。例えば、筆者が扱っているウォールドビーの説教集は、一年間の日曜日及びいくつかの最も重要な祝日を含む六〇の機会のために書かれた五六の説教からなる典型的な範例説教集だが、一四世紀から一五世紀の草書体かつ略式綴りのラテン語で記された三〇〇頁の写本として現存する。当時古書体学の初心者であった筆者が字体とラテン語略字に慣れるまでに時間を要したとはいへ、この著作全体を活字におこすのに丸一年近くかかったのである。

脈のなかにおかれる時、読まれるに値するのである。

筆者自身は、前述した「水平的アプローチ」とは異なり、一つの範例説教全体を扱って、それを多角的に考察する「垂直的アプローチ」によって、ウォールドビーの説教集を分析してきた。ウォールドビーの「新生日説教集」の典型性の測定において、同種の説教集との比較を行う水平的アプローチを探った研究の成果の恩恵を大いに受けるのは当然でも必要でもある。しかし、垂直的アプローチによって、同説教集を、アウグスティヌス隠修士会の教育史料、同会図書館蔵書目録、説教著作マニュアル、古代の修辞学著作といった、同説教集と深く関連しつつも説教集ではない様々な種類の史料と比較検討することが可能になる。こうして水平的アプローチに垂直的アプローチを加味できれば、マス・メディアとしての範例説教集の性質を、托鉢修道士の教育・訓練から、執筆・口頭での民衆への伝達までの様々な過程を、高い精度で描くことが可能になる。

例えば、この過程のなかで托鉢修道会修道院付属図書館が果たした役割について以下のことがわかつてきた。ウォールドビーが活動していたヨークのアウグスティヌス隠修士会修道院付属図書館からは、蔵書目録が現存する。一四〇〇年以前のものとしては屈指の規模を誇るこの蔵書目録を詳細に検討すると、特に選ばれた館内閲覧図書群が編まれて存在していたことがわかる。ウォールドビーの

説教集は館内閲覧図書群に含まれていた。蔵書目録に記された著作と、ウォールドビーが説教集で引用している著作とを比較することにより、同図書館は多様な目的に応じる蔵書を備えるが、館内閲覧図書群として選び抜かれた著作は、スコラ神学ではなく説教の著述支援に重点化・最適化されていたことがわかる。托鉢修道会付属図書館は、説教者養成および説教著述支援著作の伝播において中心的な役割を果たすべく入念に企図されていたのである。さらに、説教支援著作の流通は、個々の托鉢修道会の教育システム内で完結するのではなく、それを超えて行われていたこともわかつてくる。⁽⁵⁾ くわえて実際の説教執筆の段階に照準すると、説教者たちが自らのメッセージを託した説教形式からは、彼らがどのような注意を払って説教を執筆したか、あるいは執筆するように訓練されたかについて数多くの貴重な手がかりが得られる⁽⁶⁾。

ただし、範例説教は執筆段階で説教者を支援するものだから、説教が具体的にどこで誰にむかって行われ、聴衆にどのように受け止められたかといった問題については限界のある史料である。この点については、説教の聞き手が書き記した筆録説教と呼ばれる比較的稀少な史料に注目する研究が進展している⁽⁷⁾。この方面からの研究と補い合いつつ、範例説教の研究からも、受容の問題にある程度接近できると筆者は考えている。

このため、托鉢修道士の説教のマス・メディアとしての性質に注目する近年の研究の多くは、ダブレーのように、最も広く普及していたと思われる範例説教集をいくつか選び、ある一定の日曜日のための説教を並行的に扱う「水平的アプローチ」を探っている。こうしたサンプリングによる横断的研究によって、一三世紀から一五世紀の説教には一定程度の均質性があることがわかつってきた。この方法は、同じ主題を扱う数多くの説教を相互に比較する作業を行うことで、ある主題について民衆に対してもなされる典型的な説教とはどのようなものかという感覚が得られるという効果も伴つている。すなわち、神学者による高度な議論だけに頼ることなく、教会が民衆に流布しようとした個々の教説（説教の内容）についてかなり正確な知識が得られるようになったのである。

こうした横断的研究に見られるように、近年の説教研究は、特権的な知識人宗教者の高度な靈性あるいはテクストそのものにのみ照準するのではなく、中世盛期から後期にかけての活版印刷以前の大量言説普及システムという、この時代に特有のコミュニケーションのあり方、あるいは伝達様式というコンテキストを踏まえている。説教テクストを手がかりにして、このコンテキストそのものの探求を推し進め、さらにその地点から説教テクストを読み直すことが筆者の課題である。ウォールドビーの説教集も、まさにこのような文

- 中古研究の国際会議が開催され、その開会式で、西田博士は「中古研究の現状と問題」を題して講演された。西田博士は、この講演の内容を、『中古研究』第1号に掲載された。西田博士は、この講演の内容を、『中古研究』第1号に掲載された。

(8) J. B. Schneyer, ed., *Repertorium der lateinischen Sermones des Mittelalters für die Zeit von 1150-1350*, 11 vols. (Münster, 1969-1980). Schneyer, G. H. (ed.), *Medieval Latin Sermons* (London, 1970).